

≪ Misère de l'homme ≫ から ≪ Divertissement ≫ へ

湊 野 正 満

序 ブレーズ・パスカル(1623-1662)の『パンセ』所収の ≪ Divertissement ≫ と題する断章の自筆原稿を見ると、その表題ははじめ ≪ Misère de l'homme ≫ と記され、次いで横線で消され、その上側に ≪ Divertissement ≫ と改められている。表題のこの改訂は、それ自体すでに我々の興味を惹く。

まず、もとの題の ≪ Misère de l'homme ≫ というのは、写本版『パンセ』¹⁾ の第三章に見られる表題と同じであること。次いで改訂後の表題 ≪ Divertissement ≫ は、同第八章の表題でもあること。最後に、この ≪ Divertissement ≫ という長い断章こそ、写本版『パンセ』第八章のほとんど全体を構成するものであること。

以上の三点を考え合せると、この表題の修正は、単にそれのみに止まるものではなく、この断章の成立と共に、すなわち、この断章の表題が改められると共に ≪ Divertissement ≫²⁾ の章が誕生したのではないかと、つまり、もともと ≪ Misère de l'homme ≫ について記された文章が、やがて ≪ MISERE DE L'HOMME ≫ の枠をはみ出し、成長し、ついには ≪ DIVERTISSEMENT ≫ という新しい一章を構成するようになったのではないかという仮説が浮んでくる。本試論ではこの仮説がどの程度有効であるかを、自筆原稿写真版の調査を通じて考えて行きたい。

第一章 5 枚 の 紙

1 この断章の原稿は、他のほとんどの『パンセ』断章のものといっしょにフランス国立図書館蔵の Recueil Original des Pensées の中に見出すことが出来る。

≪ Divertissement ≫ の断章は5枚の紙のそれぞれの片面に記されている。³⁾ 5枚のうち4枚はほぼ同じ大きさであるが、1枚は他の4枚と同じ大きさの紙の上側3分の1ほどを切り取った残りの3分の2であろうと思われる。

5枚の紙のうち2枚にはパスカルが口述筆記させたテキストが含まれている。この書き取られたテキストにもパスカルの手が加えられており、この草稿原稿の原本

性 (authenticité) は疑う余地のないものである。

2 これらの5枚の紙は Recueil Original の台紙 p 133, p 139, p 209, p 210, p 217 に貼りつけられている。Recueil Original の台紙では、この5枚の紙が頁をとんで存在するが、この点については、18世紀初頭に、草稿の束がなくなならないように一冊のアルバムに貼りつけられた際に起ったことであろうと考えられる。というのは、これらの草稿の束の発見時の状態を保っているといわれている第一、第二両写本のいずれも、この5枚の紙のテキストをいっしょに扱っていることから推察できるのである。

3 原稿の解読作業は、P.-L. Couchoud: Discours de la Condition de l'Homme (Albin Michel, 1948) 中の原稿写真版により、トゥルヌール版『パンセ』(édition paléographique) の助けを借りて進めた。

4 原稿写真版の各パラグラフに便宜的に番号 I, II… を付けた。小論中では、このローマ数字によって各段落を示すこととする。

≪ Divertissement ≫ の記されている紙についても Recueil Original の p 139, p 210, p 209, p 217, p 133 を、それぞれ便宜的に 1, 2, 3, 4, 5 ページと呼ぶこととする。

5 ≪ Divertissement ≫ のテキストの最後の状態について。『パンセ』の多くの断章は、パスカルの企てていた『キリスト教弁証論』のための準備のノートであり、完成されたものとして書かれたわけではない。従って決定稿というものは存在しないはずである。しかし小論中では「テキストが残された最後の状態」を便宜的に「決定稿」と呼ぶ。

6 ≪ Divertissement ≫ の草稿原稿には、いくつもの signe de renvoi が付けられており、これらを頼りに読み進むと一連のテキストが現われる。これが「決定稿」である。このほかに、signes de renvoi の付けられていないメモが左側余白にいくつか存在する。

7 「決定稿」を I - 4 で示した番号によって表わしてみよう。

<u>I-II-III-IV</u>	<u>VII-VIII-IX</u>	<u>XIII-XIV</u>	<u>XVII</u>	<u>XXII</u>	<u>XV</u>
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(4)

下段のアラビア数字は草稿のページを示すものである。これを見て、次の2点が気がつくであろう。(イ) 段落を示す番号は I から XXII までであるが、V, VI, X, XI, XII, XVI, XVII, XIX, XX, XXI の欠けていること。(ロ) ページを示すアラビア数字

の配列は1, 2, 3, 4, 5, 4 となること。(イ)は欠けている数字の段落が放棄されたことなどを示し、(ロ)は一度書き記された一連の文章の接続が変更された⁴⁾ことを示すものと思われる。以上の2つのことが、すでに本断章の成立過程の複雑さを予想させる。

8 ところで「決定稿」の順序によれば、草稿は p1, 2, 3, 4, 5, 4 の順で読まなければならない。このことが文章の接続の変更を示しているとすれば、まず草稿がいかなる順序で、5枚の紙の上に書かれたかを明らかにする必要がある。

9 とはいうものの、前半の p1, 2, 3 については、各ページの終りと始めを読み合わせれば、それらが順々に書かれたものであることが容易に知られる。問題は p4 と p5 のいずれが先に書かれたかということである。

4 ページは一見してわかるように、パスカルが口述筆記させたものが大部分である。XV■と行間の加筆、余白の書き入れがパスカルの手になるものである。これに対し、5 ページは、すべてパスカルの手になるものである。

10 p4及びp5の書き出しを検討してみると、共にはじめに記されていたテキストに加筆がなされている。それぞれの書き出しの部分を加筆修正のなされる以前の状態に復元してみると奇しくも双方とも Car で始められていることがわかる。そこで p4 と p5 の書かれた順を明らかにする手がかりとして、この2つの Car がどの内容を受けているかを考えて行こう。

11 まず5 ページの方から考えよう。前述のごとくこのページの Car で始まる文章の上には XX が記されている。これは4 ページ下段の XV■と共に、ひとつの段落を構成している。トゥルヌールも彼の古文書学的版で示しているごとく、XV■とXXはあとのからの加筆である。⁵⁾ これらは5 ページにある XX の一部とほぼ同じ文章である。すなわち、パスカルは4 ページの口述筆記させた文章(XV, XVI, XVII)の下側余白と5 ページのXXの上側余白とにXXの一部を移そうとしてやめたのである。

さて5 ページの始めでパスカルは le divertis とまで書いてそれを横線で消している。その行の頭には、一度は記されたもののあとから消された C (signe de renvoi) の記号がある。ところで4 ページの口授された XVII の終りにも同様に消されたCの記号がある。このことは、p5のXXはもともとp4のXVIIに続くものであったと思わせる。この2つの部分を内容的に検討すると、XVIIの終りでは、人間には倦怠の原因がいくらでも満ちあふれているので、どんなに取るに足らぬものでも氣ばらしするのに事足りることが記されており、XXでは、このような取るに足らぬものがどんな意味を持っているのかが探求されるのである。

以上のごとく、消されたCという *signe de renvoi* の示す事実から考えても、内容のつながりを考えても、草稿はp4のXVIからp5のXXにつづいていたことは明らかである。

12 次にもうひとつのCarすなわち4ページ始めのCarの検討に移ろう。先のCarが4ページと5ページをつなげるものであったのだから、今度のCarは3ページと4ページをつなぐものとなりそうであるが、こちらは少々複雑である。

XIVの写真版を見ると、下から3行はパスカルの手で消されている。又、左余白には加筆がある。まずこの加筆がいつのものであるかを解明することから始めよう。ところでこの余白の加筆は4ページのXVIとほぼ同内容であるから、一方は他方から引き写されたものである。故に3ページのXIV余白の加筆と4ページのXVIではどちらが先に成立したのかを明らかにせねばなるまい。

草稿を一見してわかるように、XIVの余白に記された文章には、まったく加筆がないのに対し、XVIは口述筆記されたものにパスカルが手を入れたものである。このことからXVIの方が先に成立したと推測できる。

まずXVIの口述筆記された状態のテキストだけを読んでみよう。原稿2行目の「*car quand même ils ne penseraient pas aux misères de leurs conditions ou ce qui les porte dans l'ennui.*」には横線がひかれ、消されているが、この線は後からパスカルの手によって引かれたものと思われる。なぜなら、この横線が口述筆記者のものであるとすれば次の「*quand ils n'y penseraient pas [...]*」のyが、いったい何をうけるのかわからなくなるからである。さて、口述筆記されたテキストは以下のごとくである。

(XVI) Le divertissement est une chose si nécessaire aux gens du monde qu'ils sont misérables en [口述筆記者が sans の s の音を聞き落とし、鼻母音だけを写したもの。後でパスカルの手で sans と訂正されている] cela. Car quand même ils ne penseraient pas aux misères de leurs conditions ou ce qui les porte dans l'ennui ou même quand ils n'y penseraient pas et qu'ils n'auraient aucun sujet de chagrin, l'ennui de son autorité privée ne laisse pas de sortir du fond du cœur où il a une racine naturelle et remplir l'esprit de son venin.

後でパスカルはCar以下を修正する。この修正後の文章とXIVの余白の文章とを比較してみよう。「*l'ennui de son autorité [...]*」以下は、ほとんど同じであるが、前半の文章は類似した内容を異なった表現で表わしている。

[XVI]

tantôt un accident leur arrive,
 tantôt ils pensent à ceux qui
 leur peuvent arriver ou même
 quand ils n'y penseraient pas,
 et qu'ils n'auraient aucun
 sujet de chagrin,
 l'ennui de son autorité
 privée ne laisse pas de
 sortir du fond du cœur
 où il a une racine
 naturelle et remplir tout
 l'esprit de son venin.

[XIV の余白]

ou l'on pense aux misères qu'on
 a, ou à celles qui nous menacent
 et quand on se verrait même assez
 de l'abri de toutes parts,
 l'ennui de son autorité
 privée ne laisserait pas de
 sortir du fond du cœur
 où il a des racines
 naturelles et de remplir
 l'esprit de son venin.

以上の2つの文章の前半を比較すると XVI の方は、短い文章中に arrive, arriver, pensent, penserait と同じ語がくり返され、又文章構成も雑然としているのに対し、XIV 余白の文章の方は、同じ語、同じ言い方が避けられ、すっきりとまとめられている。このことは XIV 余白のテキストはパスカルが XVI を参照しながら、より良い表現にあらためていったものであることを明らかに示している。

13 以上のごとく、p3の XIV 余白のテキストは p4の XVIより後に成立したものであることが明らかになった今、我々に課せられているのは、XVの Car以下の文章が XIVに直接（すなわち XIV 余白のテキストを間にはさまずに）続くものであるか否かという問題である。内容を見ると XIV までは、地上の最高の地位である国王の身分を念頭に置いて、王の身分ですら、divertissementの助けなしには幸せではないことを説いてきた。そして XIVの後半で ≪ Nulle condition n'est heureuse sans bruit et sans divertissement et toute condition est heureuse tandis (=pendant) qu'on jouit de quelque divertissement. Mais qu'on juge quel est ce bonheur qui consiste à être diverti de penser à soi. ≫ と結ぶ。ところで上の引用文の構造は大まかに④「身分及び divertissementの幸福に対する関係」⑤「みずからについて考えない」から成り立つものと捉えることができよう。

XVを見てみよう。

(XV) Car pour parler selon la vérité des diverses conditions des hommes, ④ ceux que nous appelons de grande qualité comme un surintendant,

un chancelier, un premier président ne sont autres choses que des personnes qui ont dès le matin un grand nombre de gens chez eux pour les entretenir de diverses affaires à leur réveil et ㊦ ne leur laisser pas une heure en la journée pour penser à eux-mêmes et ㊥ quand ils sont dans la disgrâce et qu'on les renvoie à leurs maisons des champs où ils ne manquent ni de biens pour leur nourriture et leur logement, ni de domestiques pour les assister dans leurs besoins, ils ne laissent pas d'être misérables et abandonnés parce que ㊦ personne ne les empêche de songer à eux.

XV は ㊥ ㊦ ㊥ ㊦ の構造になっている (㊥ というのはそこでは「身分と divertissement の関係」しか取り上げられていないからである)。このように XIV 後半と XV が同じ構造を持っているのは、XV の始まりにある Car が示すように、XV が XIV 後半の説明になっているからである。従って、もともと XV は XIV につづくものであったと結論できる。

14 以上検討してきた如く 4 ページの加筆前の書き出しが 3 ページの加筆前の文章の終りに、又同様の状態で 5 ページの書き出しが 4 ページの終りの文章につづくものであったと推定できよう。一方 p1, p2, p3 の順序については、先に述べた通り問題はないのであるから、《Divertissement》の 5 枚のテキストは結局 p1, p2, p3, p4, p5 の順に成立していったと考えられる。

第二章 ある思想の誕生

1 《Divertissement》の断章の成立過程を考えるために、まず、草稿原稿の 3 ページ中頃より上に見出せるⅫの段落に注目しよう。というのは、このⅫが、パスカルが口授して書きとらせたものであるのに対し、このページのそれ以外のテキストは、すべてパスカル自身の手になるものであるからである。このことは、パスカルがⅫまで書いてから疲れたのでⅫだけを口述筆記させⅫ以下を再び自分で書き続けたと単純に判断して良いだろうか。あるいは、ⅫとⅫの間には時間的断絶があるかも知れぬではないか。しかし、いずれにしても、どちらにも決め手がないので、とりあえずⅫとⅫとの間に時間的断絶があるものとして、読んでみようではないか。すなわち、仮にⅫまでを本断章の「初稿」と考えてみよう。もしこの「初稿」がひとつのまとまった思想を表現し、結論を備えており、かつ《MISERE DE L'HOMME》の章にふさわしい内容を持っていれば、この仮説は、仮説以上の

価値をもつことになろう。そこでまずⅠからⅪまでのテキストを Méthode de double lecture⁶⁾ に従って読んで行こう。

2 「初稿」

(I) Misère de l'homme.

(II) Quand je m'y suis mis quelquefois à considérer les diverses agitations des hommes et les périls où ils s'exposent dans la guerre, j'ai dit souvent que tout le malheur des hommes vient de ne savoir pas vivre en repos dans une chambre. Un homme qui a assez de bien pour vivre, s'il savait demeurer chez soi avec plaisir, n'en sortirait pas pour aller sur la mer, voir une ville étrangère, ou aller chercher du poivre, ou n'achèterait une charge à l'armée si cher, pour aller tous les ans se faire blesser et assommer que parce qu'on trouverait insupportable de ne bouger de la ville; et on ne recherche les conversations et les divertissements des jeux que parce qu'on ne peut demeurer chez soi avec plaisir. C'est pour éviter ce mal insupportable qu'on achète des charges pour etc. (III) Toutes les peines qu'on souffre ne viennent donc que de cela seulement qu'on ne sait pas demeurer chez soi en repos et avec plaisir.

Mais quand j'ai pensé de plus près et qu'après avoir trouvé la cause de tous nos malheurs j'ai voulu en découvrir la raison, j'ai trouvé qu'il y en a une effective qui consiste dans le malheur de notre condition faible et mortelle et si misérable que rien ne peut nous consoler lorsque nous y pensons de près.

(IV) Quelque condition qu'on se figure où l'on assemble tous les biens qui peuvent nous appartenir, qu'on s'imagine un roi accompagné de toutes les satisfactions qui peuvent le toucher. S'il est sans divertissement et qu'on le laisse considérer et faire reflexion sur ce qu'il est, il tombera par nécessité dans les vues qui le menacent, des révoltes qui peuvent arriver et enfin de la mort et des maladies qui sont inévitables, de sorte que s'il est sans ce qu'on appelle divertissement, le voilà malheureux, et plus malheureux que le moindre de ses officiers, quelque peu de fortune qu'il ait s'il est à la chasse ou s'il joue avec quelque bonheur. (V) L'unique bien des hommes consiste donc (VI) à être divertis de penser à leur condition ou par une occupation qui les en détourne, ou par quelque passion agréable et nouvelle qui les occupe, ou par le jeu, la chasse, quelque spectacle attachant, et enfin par ce qu'on appelle divertissement.

(VII) Et de là vient que le jeu, la conversation des femmes, la guerre, les grands emplois sont si recherchés. Ce n'est pas qu'il y ait en effet du bonheur, ni qu'on s'imagine que la vraie béatitude soit d'avoir l'argent qu'on peut gagner au jeu, ou dans le lièvre qu'on court: on n'en voudrait

pas s'il était offert. Ce n'est pas cette possession languissante et qui nous laisse penser à notre malheureuse condition qu'on recherche, ni les dangers de la guerre, ni la peine des emplois, mais c'est le tracis qui nous détourne d'y penser et nous divertit.

(VIII) De là vient que les hommes aiment tant le bruit et le remue-mment; de là vient que la prison est une supplice si horrible; de là vient que le plaisir de la solitude est une chose incompréhensible. Et c'est enfin le plus grand sujet de félicité de la condition des rois de ce qu'on essaie sans cesse à les divertir et à leur procurer toutes sortes de plaisir.

(IX) Voilà tout ce que les hommes ont pu inventer pour se rendre heureux et ceux qui font sur cela les philosophes et qui croient que le monde est bien peu raisonnable de passer tout le jour à courir après un lièvre qu'ils ne voudraient pas avoir acheté, ne connaissent guère notre nature. Ce lièvre ne nous garantirait pas de la vue de la mort et des misères qui nous en détournent, mais la chasse nous en garantit.

(X) Le conseil qu'on donnait à Pyrrhus, de vivre en repos qu'il allait chercher par tant de fatigues, recevait bien des difficultés. Dire à un homme qu'il vive en repos, c'est lui dire qu'il vive heureux; c'est lui (XI) conseiller d'avoir une condition toute heureuse et qu'il puisse considérer, sans y trouver sujet d'affliction. Aussi les hommes qui sentent naturellement leur condition n'évitent rien tant que le repos, il n'y a rien qu'ils ne fassent pour chercher le trouble.

(XII) Ainsi on se prend mal pour les blâmer; leur faute n'est pas en ce qu'ils cherchent le tumulte, s'il ne le cherchent que comme un divertissement mais le mal est qu'ils le recherchent comme si la possession des choses qu'il recherchent les devait rendre véritablement heureux, et c'est en quoi on a raison d'accuser leur recherche de vanité; de sorte qu'en tout cela et ceux qui blâme et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme.

3 上にかかげたテキストを我々が慣れ親しんでいる ≪Divertissement≫ のテキストの一部としてではなく（そのコンテキストにおいてではなく）一個の独立したテキストとして読んでみよう。

4 パスカルはどのような問題提起を行なっているだろうか。冒頭の文章Ⅱにおいて彼は人間の様々な動揺について考え ≪tout le malheur des hommes vient de ne savoir pas vivre en repos dans une chambre≫ という命題を提出する。

さらに第2の段落（Ⅲ）では、人間のあらゆる不幸の原因を見つけたのでその理

由を見出したいと思って考えてみるとひとつ見つかったのでそれをお見せしようというわけである。これはⅡで提示した命題を掘り下げたものである。このように問題提起はいずれも人間の不幸についてなされている。

5 さてパスカルはこの問題に次のごとき解答を与えている(Ⅳ－Ⅷ)。まず、一見不幸から最も遠い存在、地上の権力の最高に位し何不自由ないはずの王を例にとる。あらゆる満足を一身に集めている王ですら、もし彼に *divertissement* を与えずに、王に自分が何ものであるのかを考えさせておけば、起りうる反乱や病いや死などの考えに陥り不幸になってしまう。従って人間にとって唯一の幸福は、おのれの置かれている状態を考えることから気を紛らわすことに依存している。これがパスカルの与えた解答である。

6 次にⅨ以下のテキストの意味について注目したい。

パスカルはⅩのはじめに *«[...]on philosophe sottement en disant que les rois ne sont pas heureux parce que les choses qu'ils possèdent ne les»* とまで書いたが、より具体的に書くことにして、この文章を棒線で消し、イタリア侵入を企てていたピリウス王(v. 318 av. J. C. — 272)にキネアス(? — v. 277 av. J. C.) が忠告を与えるエピソードを例に引き、それに注釈を加えることにする。

ピリウス王に与えたキネアスの忠告が、人間の本性と相入れぬものであることを示した後に、パスカルは *«ce n'est donc pas entendre la nature»* とまで書き、次にこれを横線で消した。パスカルがこのピリウス王のエピソードに物語らせようとしたものは、一体何であったのだろうか。Ⅲで提起した問題はすでにⅦまでで一応答えられているのだから、このエピソードには何か別の意味が籠められているはずである。

ここで一旦Ⅸに眼を転じよう。*«[...]ceux qui font sur cela les philosophes et qui croient que le monde est bien peu raisonnable de passer tout le jour à courir après un lièvre qu'ils ne voudraient pas avoir acheté ne connaissent guère notre nature.»* (強調筆者)。ここではピリウス王のかわりに人々が、ピリウスの侵略戦争のかわりに狩が登場する。ピリウスに忠告を与えるキネアスは人々が一日中うさを追いかけていることを哲学者のふりをして由なしと断ずる者たちと同類である。パスカルは、哲学者のふりをするこの者たちを我々の本性を知らぬものと言っている。従って先にあげたキネアスが人間の本性を知らぬというピリウスのエピソードはⅨを説明ないしは例証していると考えられる。ピ

リュスのエピソードの終りにパスカルが «ce n'est donc pas entendre la nature (de l'homme)» と書きかけたことは意味深い。パスカルはこれをすぐ横線で消し、数行を記した後にⅩを口授することになる。騒ぎを求める人々を批難する人々は人間の本性を知らないのであるが、他方騒ぎを求める人々も人間の本性を感じとって本能的にそれに従っているまでで、やはり人間の本性を理解していない。«[...] et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme.»

7 なぜパスカルは人間のこの本性が理解されていないことをこれほどまでにくり返し述べなければならなかったのであろうか。それはよほど重要なことであるはずだ。それではなぜパスカルはそのことをかくも重要であると考えたのか。それは先人、キネアスやモンテーニュ（1533－1592）らの気づかなかった人間のこの本性の意味を、彼こそが考え出したからにちがいない。ピリュスのエピソードではキネアスがこの人間の本性に気づいていないことは明らかである。パスカルがこのエピソードを知ったのは、聖書と並ぶパスカルの愛読書モンテーニュの『エッセー』からであったことは、アヴェ（1813－1889）以来『パンセ』諸版の編者が指摘するところである。モンテーニュはピリュスのエピソードに続けてルクレティウス（v. 98－55 av. J. - C.）の一節を引用しているが、ここからモンテーニュの考えの一端が知られるであろう。「明らかに彼はその欲望を限ることを知らなかったのだ。真の幸福の境を知らなかったのだ」（関根秀雄訳モンテーニュ『随想録』より）。⁷⁾

パスカルはⅢで «j'ai trouvé qu'il y en a une effective» と書き記しているが、この «j'ai trouvé» にはアルキメデス（287 av. J. - C. - 212）の «Euréka !» と同じ想いが込められているのである。

8 パスカルはこのような点には大胆である。例えば断章 577 では、アウグスチヌス（354－430）及びモンテーニュについて次のように主張する。

Saint Augustin a vu qu'on travaille pour l'incertain, sur mer, en bataille, etc.; mais il n'a pas vu la règle des partis, qui démontre qu'on le doit. Montaigne a vu qu'on s'offense d'un esprit boiteux, et que la coutume peut tout; mais il n'a pas vu la raison de cet effet.

ここでは言外に自分はアウグスチヌスやモンテーニュの見分けなかったものを見た主張しているのである。先の場合も同様の心理が働いているといえよう。

9 パスカルが «Divertissement» の断章を書き始めた動機を我々はここに明確に知ることができる。パスカルは、これまで誰も見抜かなかった «Divertis-

sement》のメカニズムを発見したのでこの文章を書き始めたのである。

10 以上試みたように、本章2節で挙げたテキストは、人間の不幸（幸福）に関する問題を提起し、それに対する解答を示し、さらにその解答の独創性を主張するという構成をもっており、一個の独立したテキストとして十分に読みうるものであることがわかった。故にこのテキストを《Divertissement》の「初稿」として考えて良いであろう。

11 ところで二写本に従えば『キリスト教弁証論』の Table des liasses は <Ordre>、<Vanité>、<Misère>と続く。<Vanité>では人間が真理に達し得ぬことが、<Misère>では真の幸福に達し得ぬことが主として説かれている。従って《Divertissement》の「初稿」は、それに与えられていた《Misère de l'homme》という表題にふさわしい内容を持つと言えよう。

第三章 発 展 期

1 前章で、我々は《divertissement》の思想の最初の状態、すなわち「初稿」の存在とそのテキストを推定した。本章では《Misère de l'homme》という表題を与えられていた初稿が、その後どのように発展していったのか、その最初の大きな成長の跡をたどってみたい。

2 第一章で我々は《Divertissement》の記されている5枚の紙が p1, p2, p3, p4, p5 の順で書かれていったことを明らかにした。本章では、まず《Divertissement》の発展の解明に重要な手がかりを与える4ページの検討から始めよう。

このページでは XVIIIを除いてははじめ口授して書き取らせた文章に、パスカル自身が後から手を入れている。ところで XVIIIは5ページに記されている XXIIの文章の一部とほとんど同じものである。これは XXIIの一部が一旦は4ページの下之余白及び5ページ上側余白に移されすぐに放棄されたものであった(I-11)。先に論じた通り5ページの文章は、4ページより後に綴られたのであるから、パスカルの手になる XVIIIが4ページに記されているとはいえそれは5ページのものがあとから写されたのであって、もともとは4ページには口述筆記された文章しかなかったのである。⁸⁾

3 口述筆記されたテキストだけを読んでいこう。XVの冒頭の Car は前ページの XIV(但し余白の加筆は除く)を受けるものであることはすでに述べた(I-12~13)。

又XVは「決定稿」の最後に位置するものであることも確認しておこう(1-7)。

さて4ページ中段から始まっているXVIに注目しよう。「決定稿」以前ではXVIはXVIIと共にすぐ上にあるXVに続いて口述筆記された文章であるにもかかわらず、XVに続く文章ではなく、Divertissementに関する別個の箴言風の考察であった。ところがXVIは「決定稿」では部分的修正を加えられて、3ページのXIV余白に移され《Divertissement》の断章全体に組み入れられることになる(1-12)。

ところでパスカルは自分の頭にある考えをとりあえずひととおり文章にしてみ、そこで通常我々がするようにすぐに手を加えるということはず、それをしまっておいて、客観的に自分の文章をながめられるようになってから再びそれを取り出し、手を加えるという習慣をみずからに課していたことが知られている。⁹⁾

故にXVのすぐ下にDivertissementに関するものとはいえXVまでの文章と直接つながらない箴言風の考察を口授したということは、その時までには自分の頭にあった考えをすべて述べてしまったとすっかり安心したことを示している。とすると、先の初稿に続いて第二稿と呼ぶべきものが存在することになる。初稿のテキストはI-II-III-IV-V, VI-VII-VIII-IX-X, XI-XIIであった。第二稿で加筆されたテキストはXIII-XIV, XVである。より正確に言えば、パスカル自身の手でXIII-XIVをつけ加え、XVは口授し書き取らせたのである。ここでパスカルはこの断章を終えたと考えそのすぐ下にDivertissementに関する箴言的考察を口述筆記させたと思われる。

4 つけ加えられたテキストは以下の通りである。以下のテキストにはさらに修正が加えられることになるがここではMéthode de double lectureにより修正の加えられていない成立時のテキストを再現する。

(XIII) Car quand on leur reproche que ce qu'ils recherchent avec tant d'ardeur ne saurait les satisfaire, s'ils répondaient comme ils devraient le faire, s'ils y pensaient bien, qu'ils ne recherchent en cela qu'une occupation violente et impéteuse qui les détourne de penser à soi et que c'est pour cela qu'ils se proposent un objet attirant qui les charme et les attire avec ardeur, ils laisseraient leurs adversaires sans repartie mais en croyant comme ils font qu'ils seront ensuite dans un heureux repos ils donnent beau à se faire battre mais dans la vérité on ne combat que l'objet imaginé et non pas celui qu'ils ont en effet et qui se cache et se dérobe à leur vue dans le fond de leur cœur.

(XIII 後半) Car ils ont un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au dehors, qui vient du ressentiment de

leurs misères continuelles. Et ils ont un autre instinct secret qui leur fait connaître que le bonheur n'est que dans le repos et non pas dans le tumulte. Et de ces deux instincts contraires il se forme en eux un projet confus qui les porte à tendre au repos par l'agitation et à se figurer toujours que la satisfaction qu'il n'ont point leur arrivera si après avoir surmonté quelques difficultés qu'ils envisagent ils pouvent s'ouvrir par là la porte au repos.

(XIV) Ainsi s'écoule toute la vie. On cherche le repos en combattant quelques obstacles et si on les a surmontés le repos devient insupportable par l'ennui qu'il engendre. Il en faut sortir et mandier le tumulte. Nulle condition n'est heureuse sans bruit et sans divertissement, et toute condition est heureuse tandis qu'on jouit de quelque divertissement. Mais qu'on juge quel est ce bonheur qui consiste à être diverti de penser à soi.

(XV) Car pour parler selon la vérité des diverses conditions des hommes ceux que nous appelons de grande qualité comme un surintendant, un chancelier, un premier président ne sont autres choses que des personnes qui ont dès le matin un grand nombre de gens chez eux pour les entretenir de diverses affaires à leur réveil et ne leur laisser pas une heure en la journée pour penser à eux-mêmes et quand ils sont dans la disgrâce et qu'on les renvoie à leurs maisons des champs où ils ne manquent ni de biens pour leur nourriture et leur logement, ni de domestiques pour les assister dans leurs besoins, ils ne laissent pas d'être misérables et abandonnés parce que personne ne les empêche de songer à eux.

5 以上のテキスト中、特に XIII の後半部分は、注目に値する。初稿にはなかった思想が付け加えられることになるからである。

人間には二つの秘められた本能がある。その一方は、人間の現在の不幸な状態からくるもので、それによって人間は外に気ばらしを求める。他方は、人間が墮落する以前の本性の偉大さの名残りとして留めているもので、この本能によって我々は幸福が動揺のうちにではなく、休息のうちにあることを知っている。ところが、人間はこの二つの相反する本能からひとつの混乱した企てをたててしまう。そして人間は騒ぎによって休息に向おうとするし、又直面している困難をいくつか乗り越えた後に、そこから休息の門を開くことができると常に思いこんでしまうのである。

この分析においてはいまや ≪divertissement≫ のメカニズムが考察の対象となっている。いわば ≪divertissement≫ の ≪raison des effets≫ とも言うべきものである。初稿では、≪misère de l'homme≫ を解く鍵であった ≪divertisse-

ment》の思想は第二稿でその「現象の理由」が付け加えられることにより、一步深化したことが見てとれる。

6 ところで XV の下にパスカルは 《Divertissement》 の第二稿とは別の 《divertissement》 に関する箴言風の短い文章を口述筆記させたのであった。次にこの文章の意味を考えていく。

7 (XVI) Le divertissement est une chose si nécessaire aux gens du monde qu'ils sont misérables sans cela. Car quand même ils ne penseraient pas aux misères de leurs conditions ou ce qui les porte dans l'ennui ou même quand ils n'y penseraient pas et qu'ils n'auraient aucun sujet de chagrin, l'ennui de son autorité privée ne laisse pas de sortir du fond du cœur où il a une racine naturelle et remplir l'esprit de son venin.

(XVII) Ainsi l'homme est si malheureux qu'il s'ennuierait même sans aucune cause d'ennui et il est si vain qu'étant plein de milles causes d'ennui la moindre chose comme un chien, une balle, un lièvre suffisent pour le divertir.

8 ここでは 《divertissement》 と 《ennui》 との関係が扱かれている。これまでに両者の関係に触れた文章は一度しか現われていない。《[...] On cherche le repos en combattant quelques obstacles et si on les a surmontés le repos devient insupportable *par l'ennui qu'il engendre.*》(強調筆者)。これは第二稿の際に付け加えられた文章 (XIV) で、本断章が成立する過程で初めて 《ennui》 なる語が記されるところでもある。

さて、XVI-XVII では①人間は《misère de l'homme》とりわけ避けられぬ死について考えた時に《ennui》に陥る②ところがそれについて考えない時でも、そして何の悲しみの種もないときですら人間は《ennui》に落ち込むことが説かれている。このように《ennui》にも段階が存在するのである。

9 ②で扱われている《ennui》について考えてみよう。人間が《misère de l'homme》について考えない時ですら、そして何の悲しみの種のない時でさえ、《l'ennui de son autorité privée ne laisse pas de sortir du fond du cœur où il a une racine naturelle et remplir l'esprit de son venin.》de son autorité privée とは人間の意志に無関係にということであろうが、なぜそのようなことになるのか。パスカルはこう答える。それは人間の心の奥底に倦怠が《racine naturelle》を張っていて自然に出て来て、その毒で精神を満してしまうからである。《ennui》はそれほど《naturelle》で又《essentielle》な人間の性質

(qualité) と言えるのである。

10 さて、ここでは ≪Divertissement≫ の成立を考える上で重要なポイントとなる次のことを再確認しておこう。今検討した ≪divertissement≫ に関する箴言風の文章が成立した時点でこれに関する文章は2つ、すなわち第二稿と箴言風の文章が存在していたということである。

11 ところで実証的調査から出て来たこれらの結果をパスカルの企てていた『キリスト教弁証論』の計画という地平で考えてみたい。パスカル自身のプランと考えられる両写本の ≪table des liasses≫ では、≪ORDRE≫、≪VANITE≫、≪MISERE≫、≪ENNUI≫、etc. と並んでいる。≪VANITE≫ では人間が真理に、≪MISERE≫ では善すなわち真の幸福に達し得ぬことが主として説かれている。次の ≪ENNUI≫ の章には3つの断章が分類されているのみである。従って、≪ENNUI≫ においてパスカルがどのような思想を展開しようとしていたかについては、この3つの断章及び若干の他の断章から推測するのみであるが ≪ENNUI≫ の章に関するメナール教授の次の2つの発言は我々の興味を惹かずにはいない。

1) Dans ce chapitre, le thème de l'ennui est associé à celui du divertissement, son complément naturel, qui se trouve très sommairement indiqué, afin de mettre en relief le fait de l'ennui. (J. Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, p. 191.)

2) Revenons au problème du bonheur. L'homme dans le repos ne peut que sortir son néant, sa dépendance à l'égard de toutes choses; il tombe dans l'ennui et le désespoir. En effet, à sa dépendance réelle s'oppose un désir d'indépendance qui crée le *besoin*. L'homme est ainsi précipité dans une agitation qui ne lui procure qu'un bonheur illusoire et lui fait sentir encore plus cruellement sa dépendance lorsqu'il est revenu à son premier état. Toujours ballotté entre le repos et l'agitation, entre l'ennui et l'illusion, tel est l'homme. (J. Mesnard, *Pascal*, p. 152)

(下線筆者)

第1の引用は ≪ENNUI≫ の章と ≪Divertissement≫ が補足の関係にあり、≪Divertissement≫ の文章を引き合いに出すことなしに ≪ENNUI≫ の章を論ずることが出来ぬことを示している。¹⁰⁾

メナール教授は名著『パスカル』中で両写本の目次による『キリスト教弁証論』の ≪mouvement≫ の再構成を試みている。第2の引用はこのうちの ≪ENNUI≫ の章に関する全文である。この引用は第1の引用で述べた考え方を具体的に解釈に適用したものと考えられる。引用前半の下線部分に注目してほしい。下線部分の内

容は《ENNUI》の章に分類されている断章からは明らかに出てこないものである。¹¹⁾ 逆に言えば《ENNUI》の章を『キリスト教弁証論』の全体の中に位置付けて読むとする時、それだけのことが欠落することになる。ところがこの欠落部分に《Divertissement》の第二稿を補って読むと、《MISERE》と《ENNUI》は見事につながるのである。

12 では、なぜ初稿ではなく第二稿を補わなければならぬのか。この点を説明する必要がある。第二稿では、その際に加えられた XIV そして特にそれと同時に成立したもうひとつの断章の中に《Divertissement》と《ENNUI》の関係が説かれている。初稿では《MISERE》の章にふさわしい内容が記されたが、《divertissement》と《ENNUI》の関係はまったく現われない。つまり初稿が人間の不幸について記されているものであり《MISERE》の章の完全に内側に存在するものである(Ⅱ-11)のに対して、第二稿は《MISERE》—《Divertissement》の第二稿(但し《MISERE》の章の中に分類されている)—《ENNUI》という一連のつながりを待った図式の中に存在するのである。

以上の点を考えると、《Divertissement》の初稿が書き記された時には、まだ《ENNUI》の章は存在していなかったのではないか。第二稿と共に成立した短い断章には Ennui が *Qualité essentielle de l'homme* であることが記されていた(Ⅲ-9)。ところで《ENNUI》の章の副題は《QUALITE ESSENTIELLE DE L'HOMME》である。従って第二稿及び、それと共に書き取られた短い断章が《ENNUI》の章を生み出す契機になったのではないか。¹²⁾

13 ここで次のことを確認しておこう。

《Divertissement》には初め《Misère de l'homme》という表題がつけられており、それが写本版『パンセ』の第三章の表題と同じものであることはすでに序で述べたとおりである。

第三章において推理したことに従えば、写本版『パンセ』の第八章を構成している断章 136(《Divertissement》)は第二稿の段階では、第三章《MISERE》の中に分類されていなければならないのである。

第四章 四断章時代

1 4 ページ中段から下には、パスカルが口授し、書き取らせた箴言風の短い文

章がある。そのすぐ下にあるXVIII及びそれとひとつづきである5ページの最上部のXXは5ページのテキスト(XX, XXI, XXII)が書かれた後に成立したものであった(I-11)。

5ページの加筆前のテキストはCarで始まるが、このXXは箴言風のXVI-XVIIにつながるものであり、従ってパスカルはXVI-XVII(口授されて書き取られた文章)にXXを加えたことになる。

次にXXのテキストを掲げるが、ここで重要なことは、この段階ではまだXVI-XVII及びXXの文章はあくまでも《Divertissement》の第二稿とは別個の文章であり、未だひとつのものに編成されてない状態にあるということである。尚第五章で本断章の記されている5枚の紙に見出せる数個の *signes de renvoi* を検討するが、もしこの部分のテキストの《Divertissement》第二稿への編入が先とするならば *signes de renvoi* のうちのひとつ(C)の合理的理解が出来なくなるであろう(V-4)。

テキストは例によって *Méthode de double lecture* による修正前¹³⁾のものである。

2 (XX) Car quel objet a celui-ci qui se tue à la chasse sinon de se vanter demain entre ses amis de ce sanglier qu'il aura pris? Et un autre sue dans son cabinet pour montrer aux savants une question qu'il aura résolue; et tant d'autres se font blesser en une campagne pour se vanter l'hiver des dangers qu'il a courus, aussi sottement à mon gré; et les autres se tuent pour remarquer toutes ces choses non pas pour en devenir plus sages mais seulement pour montrer qu'ils les savent, et ceux-là sont les plus sots de la bande puisqu'ils le sont avec connaissance au lieu qu'on peut penser des autres qu'ils ne le seraient plus s'ils savaient qu'ils le sont.

3 以上のテキストはXVI-XVIIに加筆されたものである。ところでXVI-XVIIを論じた際(III-8, 9)に、これらのテキストにおいて初めて本格的に《divertissement》と《ennui》の関係が分析されたことを述べた。ところで《ENNUI》の章には3つしか断章が分類されていないのであるが、XXにはこのうちのひとつとほぼ同じ内容が見出される。《ENNUI》の章の最初に分類されている断章77を引用しよう。

Orgeuil. Curiosité n'est que vanité. Le plus souvent on ne veut savoir que pour en parler. Autrement on ne voyagerait pas sur la mer, pour ne jamais en rien dire et pour le seul plaisir de voir, sans espérance d'en jamais communiquer.

XXでは人間の様々な営為は友人にそれを話したり、誇ったり又それが出来るこ

とを示したいためになされるということが述べられている。以上のように XX においてもいずれ≪ENNUI≫の章へと発展する胎動が続いていることが確認できるのである。

4 さて次にパスカルは Divertissement に関する 3 つ目の断章を記す。

(XXI) Tel homme passe sa vie sans ennui, en jouant tous les jours peu de chose. Donnez-lui tous les matins l'argent qu'il peut gagner chaque jour, à la charge qu'il ne joue point: vous le rendez malheureux. Il dira peut-être que c'est qu'il recherche l'amusement du jeu, et non pas le gain. Faites-le donc jouer pour rien il ne s'y échauffera pas et s'y ennuiera. Ce n'est donc pas l'amusement seul qu'il recherche. Il faut qu'il s'y échauffe et qu'il se pipe lui-même, en s'imaginant qu'il serait heureux de gagner ce qu'il ne voudrait pas qu'on lui donnât à condition de ne point jouer, afin qu'il se forme un sujet de passion, et qu'il excite ses passions sur cela pour ne point sentir passer le temps, pour empêcher l'ennui de se répandre et sa misère de paraître à sa pensée.

5 両写本をはじめ近代版『パンセ』は XX, XXI, XXII の順に「決定稿」に編入して来たが、最新のル・ゲルン版に至ってはじめて XX, XXI が「決定稿」から除かれ改訂されている。この問題は第五章で取り上げるのでここでは XXII が ≪divertissement≫に関する 3 つ目の断章であることを指摘するに止めよう。

6 XXI は VII と、その内容に於て親近性を示している。むしろ VII を書き直したと言っても良い。両者の相違を考えてみよう。

VII では複数の例がとりあげられているのに対し、XXI では「賭事」だけにしぼられている。又、VII では例から結論へ直結しているが、XXI ではその間の分析がある。つまり人々が賭事をするのは ≪afin qu'il se forme un sujet de passion et qu'il excite ses passions sur cela≫であると言う。

しかし両者の内容の決定的な差異は例から導かれた結論にあらわれる。双方に共通の賭の例について考えて行こう。いずれも人々が賭事に熱中する理由が説かれるが、VII では、≪c'est le tracass qui nous détourne d'y penser et nous divertit≫ XXI では≪pour ne point sentir passer le temps, pour empêcher l'ennui de se répandre et sa misère de paraître à sa pensée≫とある。XXI の方ではやはり≪ennui≫の視点が導入されている。これは XVI から重視され、XVII, XX でも取り上げられた点である。ちなみに XVIII - XXII は後からの挿入であるから、結局 ≪ennui≫の視点を含むメモが連続的に生み出されていることになる。XXII に

ついても XX と同様、いずれ ≪ENNUI≫ の章へと発展する胎動が続いていることが指摘できるのである。

7 さて、続いてパスカルは *Divertissement* に関する 4 つ目の断章を記す。以下に示すテキストも *Méthode de double lecture* によるものである。なおカッコ内は一旦記されすぐに消されたものである。

(L'homme sans divertissement, quelque heureux qu'on l'imagine, séchera de chagrin et d'ennui, et l'homme, quelque plein de tristesse qu'il soit, si on peut gagner sur lui de le divertir, le voilà heureux.) D'où vient que cet homme, qui a perdu depuis peu de mois son fils unique et qui accablé de procès et de querelles était ce matin si troublé, n'y pense plus maintenant? Ne vous en étonnez pas: il est tout occupé à voir par où passera ce sanglier que ses chiens poursuivent. Il n'en faut pas d'avantage. L'homme, quelque plein de tristesse qu'il soit, si on peut gagner sur lui de le faire entrer en quelque divertissement, le voilà heureux pendant ce temps-là. Et l'homme, quelque heureux qu'il soit, s'il n'est diverti et occupé par quelque passion ou quelque amusement, sera chagrin et malheureux.

8 パスカルは最後の行の ≪sera chagrin et malheureux≫ を後で横線で消して ≪qui empêche l'ennui de se répandre, sera bientôt chagrin et malheureux. Sans divertissement il n'y a point de joie, avec le divertissement il n'y a point de tristesse. Et c'est aussi ce qui forme le bonheur des personnes D≫ と修正するがこの修正は後で *Divertissement* に関する 4 つの断章からひとつの大きな文章を作ろうとする（結局は 3 つしか使われない）際になされたものである。この部分は自筆原稿では三行に記されているがどうしてこれを加筆と判断したのか述べる必要があろう。

草稿ではこの三行だけがつめて記されている。これは一行目を記す時に、すでに二行目、あるいは三行目、言い換えると少々長い文章を記すことを念頭に置いていることを意味し、それより上の行にはみられなかった意志、狭いスペースをなるべく有効に使おうという意志をそこに読み取ることができる。従って加筆であろうとなかろうとこの三行はひとまとまりに考えることができる。ところでこの文章は 4 ページの XV（口述筆記された文章）の上側余白の 1 行につづいていく。¹⁴⁾ この 5 ページ終りから 4 ページ頭への接続は D なる *signe de renvoi* で明示される。5 枚の紙には、A, B, C, D の 4 つの記号が使われている。このようにアルファベを

連の記号として使う以上、Dを使う時には、B、Cはすべて用いられていると考えて良い。B、C（実はDもそうなのであるが）は4つの断章を統合してひとつの大きな文章を作ろうとする際に初めて使われる（5章）。従って問題の三行は現段階では成立していなかったはずである。故に我々はこの三行を加筆と考える。

ところで修正後の文章に用いられている《qui empêche l'ennui de se répandre》はこの断章のすぐ上に記されているXXIの結論にあった表現とほとんど同じであり、XXIではこの字句の含まれている結論部分が放棄され、修正されている。従って、この修正も決定稿を作る際に加えられたものであると考えられる。

9 さて以上述べたように《Divertissement》の記されている5枚の紙にはこれまでのところ別個の4つの断章が存在していることになる。時間的に言って《Divertissement》の「決定稿」が成立する以前に、4つの別な断章が共存する時代あるいは段階があった。

10 さらに、この段階では前の段階で成立したXVII以来、《ennui》についての考察が引きつづき生み出されていることに注目しよう。しかも中にはすでに《ENNUI》の章に属すべき内容の文章（XX）すら存在する（Ⅳ-3）。

我々の考えでは、この段階（四断章時代）においてこそ、《ENNUI》の章を作ろうというパスカルの決心が生じたのである（Ⅲ-11, 12参照）。

《ENNUI》の章には3つの断章しか分類されていないが、それは次のような事情によるのではないか。パスカルは《Divertissement》の四断章時代に《ENNUI》の章を設けることを考えつき、3つの断章をそこに分類した。しかし《ENNUI》の章が十分に成長する前にパスカルは《divertissement》に関する4つの断章からひとつの長い文章を作ることを考え、さらにこの文章（「決定稿」）を《MISERE》の章に分類しておくよりも単独の章として取り扱った方が良いと判断し、新たに八章として《DIVERTISSEMENT》の章を設け、そこに再分類した。このようなわけで《ENNUI》の章は未発達の状態でとり残されることになったのであろう。

第五章 新しい章《DIVERTISSEMENT》の誕生

1 パスカルはある時《divertissement》に関する4つを文章を統合してひとつの断章を作り上げようと考えた。

2 Signes de renvoi

さて、これらの5枚の紙にはA, B, C, Dの4つの文字が《signes de renvoi》として用いられている。¹⁵⁾ A, B, C, Dと使われているのであるから、この4つの記号は同一の時期、すなわちここでは4つの断章を統合してひとつの文章を作り上げようとした際に、成立したと考えられそうである。¹⁶⁾

ところがAについては必ずしもそうではない。Aは4箇所につけられているが、そのうちの2つは放棄されている。この間の事情は次のように考えられる。まず2枚目と3枚目のつながりを明らかにするために2ページ最下部及び3ページ最上部にAの記号が記される。そして後でX, XI, XII(パスカル自身が《divertissement》の思想の独創性を主張している文章)を放棄するためにXIIIの頭の部分とXの終りに付け直し、先の2つのA印を消したのである。従ってはじめに付けられた1組のAの記号だけが初稿に含まれるものであるから、A, B, C, Dという一連の記号が使われているからといって、これらが同時に成立したわけではない。

B, C, Dは、4つの断章からひとつの文章を作ろうとした時のものである。すでにAを使っていたのでB, C, Dと使ったのであろう。又B, C, Dとあるからには、C, B, DとかC, D, Bなどの順序ではなく、B, C, Dの順で成立したと考えるべきである。結論的に言えば、4つの断章からひとつの文章を作ろうとする際にB, C, Dの順に記号を用いて文章をつなげていったという推定がなされる。¹⁷⁾

3 まずBによる変更を考えてみよう。これは次のごとくに2段階を踏んでいると思われる。

① 3ページ最下部のXIVと4ページ最上段のXVの間にXVIを挿入することを考えて、パスカルはまずXIVの左側余白部分に文章の修正を加えながらXVIを写す。そしてこの加筆の終り及び4ページ冒頭にBの印を付ける。

② しかし、すぐにXVIだけでなく、XVIIをもつづけて挿入することを考える。そこで4ページ冒頭のBの印をぬりつぶし、XVIIの頭にBの印をつけ直す。

4 さて、ここでパスカルはXVIIをどこに続けるか考え、その結果が記号Cによる改編である。これは次のごとくに3段階に行なわれたと思われる。

① XVIIはもともと5ページのXXに先行するものであるから、そのまま続けることを考え、XVIIの終りと5ページのXXの頭にCの記号をつける。

② しかし、XVIIとXXとの間にさらにXXIIの途中すなわち《D'où vient que cet homme qui a perdu [...]》以下を挿入することを思いつく。そこでXVIIの終りにつけたCの記号を消し、そのすぐうしろからXXIIの一部(D'où vient 以下)

を写しはじめ、4ページの下側余白を使い切る(XVIII)とそこにC印をつける。5ページのXXの頭のC印を消し、同時に上部余白にC印をつけ、さらに一行だけ写したところで以下の文章全部を写すことはやめ、一行で要約する(XIX)。そしてXXの文章につなげる。

③ところが、この修正では第二稿のしめくくりとして記されたXVにつながっていかないことに気づき、XXを編入することをあきらめ写したばかりのXVIII、XIXを縦線で消す。しかし、なおXVIIからXXIIへとつなげることはあきらめず、4ページ終りに消されずに残っているCを生かしXXIIの三行目の頭にCの記号を付け、その上の三行を消す。そしてXXIIとXVをつなぐ文章をXXIIの下余白及びXVの上側余白に書き記す。この際XXIIの下余白を使い切るとそこにDの記号をつけ、XVの上側余白の冒頭にDを付す。

5 我々の考えによれば、以上のごとき手続を経て《Divertissement》の「決定稿」が出来上ったのである。すなわちパスカルは5枚の紙に記されている4つの断章からひとつの文章を作りあげようとしたが、実際には3つの断章から《Divertissement》を作り上げたのだ。なお「決定稿」について言えば、ル・ゲルン以前の編者は、以上説明した本断章の成立過程を理解しなかったので、XX、XXIの断片を《Divertissement》の全体に混入し、この断章を読みにくいテキストにして来た。もっともル・ゲルンも、我々とまったく同じように考えているわけではない。ここで彼の研究を紹介しておこう。

6 ル・ゲルンは本断章を研究して、1966年、Revue de L'Université d'Ottawaに《Pascal au travail, la composition du fragment sur le divertissement》と題する論文を発表している。筆者の知る限りでは、この論文は我々以前に《Divertissement》の断章の成立過程を考究したほとんど唯一のものである。

ル・ゲルンはまず一般にパンセ断章を自筆原稿の外見から3種類に分類することを提起する。第一に、短かいメモ、第二に、個人的に記したある程度長い文章、最後に準備中のアポロジーに位置を占めるはずであったほとんど決定稿に近い論述である。

ル・ゲルンによれば《Divertissement》には決定稿とは別の、つまりははじめの状態があり、こちらは先の3つの分類の第二のものに、決定稿は第三のものに属するという。換言すると前者が個人的な考察のレヴェルであるのに対し、後者は出版することを目的とした真に文学的なテキストのレヴェルである。そして彼は5枚の紙に記されているテキストをp1, p2, p3, p4, p5の順にならべたものを初めの状態として提示する(但し、その間に、我々がすでに見てきた4つの断章の区切れ

を見出してはいない)。

このはじめの状態と決定稿との比較からル・ゲルンは次のごとき結論を引き出している。

Une comparaison rapide entre le premier jet et la version définitive pourrait laisser l'impression que les différences sont minimales: ce sont, à peu de chose près, les mêmes images, les mêmes détails concrets supportant les mêmes idées. Mais le travail du style nous montre un écrivain pleinement conscient de ses moyens qui recherche constamment une plus grande efficacité de l'écriture; le développement se fait plus concis, et l'expression devient plus aiguë, plus pénétrante, afin d'atteindre plus profondément la sensibilité du lecteur. (Le Guern, *op. cit.* p. 230)

ル・ゲルンの言う初稿と決定稿が先に述べたごとき異なる2つのレベルに対応しているという主張に我々は疑問を抱かざるをえない。又先に我々が明らかにしたような過程を経て《Divertissement》の断章が成立したとすればル・ゲルンの導き出した結論はあまり意味を持っていないように思われる。ル・ゲルンのこの研究には、批判されるべき点が少なからずあると思われるものの、次の2つの点で正当に評価されるべきである。

第一に《Divertissement》の断章の自筆原稿を調べ、そこに2つの段階が存在することを見分けたことである。この点では、我々の研究の先駆的なものである。

第二に「決定稿」以前の段階を発見したことにより、これまであやまって「決定稿」に混入されていた2つの段落(XXとXXI)を取り除いたことである。この成果は、ル・ゲルンの編纂した最新版『パンセ』の中に生かされている。

7 さて前の章で、我々は《Divertissement》の断章が4断章時代までは《MISERE》の章に分類されていたであろうと推定した。両写本の《table des liasses》では《Divertissement》の断章は現に第八章に分類されており、又本断章こそが《DIVERTISSEMENT》の章の中で最も重要なものであることを考えると《divertissement》に関する4つの断章からひとつの断章を作りあげようとした際に《DIVERTISSEMENT》の章そのものが誕生したのではないかと推定できるのである。

結 論

《Divertissement》の断章の記されている紙片には、はじめ《Misère de

l'homme》という表題がつけられ、次いで《Divertissement》と訂正された。筆者はこの変更がただ単に表題の改訂に止まらず《DIVERTISSEMENT》の章そのものの誕生に関わるものではないかという仮説をたて、自筆原稿写真版の調査を行った。

この調査から、本断章の成立過程を「初稿」、「第二稿」、「四つの断章の時代」、「決定稿」の4つの段階に分けて考えることが可能であることがわかった。その「初稿」はすでにパスカルの独創的な思想を表明していたが、修正前の表題が示すごとく《MISERE DE L'HOMME》の章に分類されていたと考えられる。これが成長して「第二稿」が出来、次に《divertissement》に関する他の3つの断章が書かれ、さらにこの生成過程の中から《ENNUI》の章が生まれたのではないだろうか。そしてこの3つの断章を「第二稿」に編入して、ひとつの文章にまとめようとした際に、独立した章《DIVERTISSEMENT》が誕生したのであろう。

付記 結論の意味

さて、我々の仮説が正しいとして、我々の導いた結論は、パスカルの企てていた『キリスト教弁証論』全体とのかかわりにおいてはどのような意味を持ちうるのだろうか。次にこの点について2つのレベルで簡単に触れておこう。第一は『キリスト教弁証論』の内的な秩序の地平、第二は『キリスト教弁証論』の成立過程の地平である。

第一のレベルというのは《DIVERTISSEMENT》の章が八章という位置に置かれているのはどのような意味を持っているのかということである。両写本の《table des liasses》を見ると、いくつかの《liasses》が集まってグループを構成していることがわかる。例えば、《VANITE》《MISERE》、《ENNUI》は次の《RAISON DES EFFECTS》を接点として《GRANDEUR》とひとつのグループを構成している。又《DIVERTISSEMENT》、《PHILOSOPHES》、《SOUVERAIN BIEN》は真の幸福をテーマにひとつのグループを作っている。さらにこの2つのグループの接点には《CONTRARIETES》が存在する。

ところでこの第二のグループでは最高善に対して人間が持っている欲求が扱われる。《DIVERTISSEMENT》においては、人間たちの大部分がどのような仕

方で幸福を求めているかについて述べられている。《PHILOSOPHES》においては、哲学者達も人間についての不完全な認識の上に立っている所以我々に真の幸福を与えてはくれぬことが、《SOVERAIN BIEN》ではすべての人間が幸福を求めるにしても信仰なしにはだれ一人として幸福を得ることはできなかったこと、人間に真の幸福を与えるのは神の恩寵のみであり、人間が謙虚にこれを求めなければならぬこと¹⁸⁾等が語られる。ここで注目すべきことは、以上の3章が民衆、哲学者、キリスト教（あるいはキリスト者）という《gradation》を構成していることである。この《gradation》はパスカルが《RAISON DES EFFETS》の中で使っているものでもあり《Divertissement》の断章を第八章として分類することにより、はじめて完成するものである。

それでは『キリスト教弁証論』の成立過程のレベルでは、我々の結論はいかなる意味を持ち得るであろうか。初稿の時点では章の題の順序から《ENNUI》と《DIVERTISSEMENT》ががぬけており、《Divertissement》の断章が成長するにつれて、《MISERE》の章のあとに《ENNUI》が加わり、さらに第八章として《DIVERTISSEMENT》の章が設けられて、両写本の《table des liasses》に見られるようなものになったと考えられる。

さて、最後に、先に我々の導いた結論にとって興味深いエチエンヌ・ペリエ(1642－1680)の一文を引用しよう。それはポール・ロワイヤル版パンセに付けられた序文(Préface)からである。そこでペリエはパスカルの『キリスト教弁証論』は完成されなかったが、かつてパスカルがその計画をポール・ロワイヤルで話したことがあるので、アポロジの全体像を知ってもらうために、そこに出席していた人の話を記そうと言って『キリスト教弁証論』のプランについて述べている。

... M. Pascal lui fait sentir de sa grandeur et de sa bassesse, de ses avantages et de ses faiblesses, du peu de lumières qui lui reste, et des ténèbres qui l'environnent presque de toutes parts; et enfin de toutes les *contrariétés* étonnantes qui se trouvent dans la nature. Il ne peut plus après cela demeurer dans l'indifférence, s'il a tant soit peu de raison; et quelque insensible qu'il ait été jusqu'alors, il doit souhaiter, après avoir ainsi connu ce qu'il est, de connaître aussi d'où vient et ce qu'il doit devenir.

M. Pascal, l'ayant mis dans cette disposition de chercher à s'instruire sur un doute si important, il l'adresse premièrement aux *philosophes* [...] (souligné par nous).¹⁹⁾

ペリエのこの証言はポール・ロワイヤルでの講演の時点では《CONTRARIE -

TES》と《PHILOSOPHES》との間に《DIVERTISSEMENT》の章のアイデアが存在していなかったという可能性を強めてくれるように思われる。²⁰⁾

(注)

1) 第一、第二両写本はパスカル自身の手になる『キリスト教弁証論』の断章配列を再現しているとされている。広田昌義氏は両写本の断章配列に依拠した版をまとめて写本版パンセと命名した。広田昌義『新しいパスカル像を求めて』 p. 181。現代思想 1977年9月号。

2) 写本版パンセの Liasses あるいは章の表題を示す語は 《DIVERTISSEMENT》のごとく大文字で記し、かつ《》でくくる。

3) パスカルが両面とも使うことは少ない。

4) Le Guern はこの接続の変更だけを頼りにして 《Divertissement》の断章の成立過程の研究をしている。しかし本文中の(4)の条件を見落しているのもので、その成立過程の十分な解明には到らなかった。Le Guernの研究は小論第五章6節で批判の俎上に載せた。

小論は1979年3月に博士後期課程一年次の研究報告として京都大学に提出されたものである。小論執筆にあたり、誤りの指摘、批判をくださり、Le Guern論文の存在を教示下さった塩川徹也先生、及び貴重な御蔵書よりLe Guern論文のコピーを取らせて下さった支倉崇晴先生にここであつく御礼申し上げたい。

5) Tourneur編 *Pensées de Blaise Pascal*. Edition paléographique. J. Vrin. 1942. p. 210.

6) 前田陽一教授の研究考察したパスカルの自筆原稿の解読法。詳しくは Yoichi MAEDA: Le premier jet du fragment pascalien sur les *Deux infinis* in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*. N° 4 p. 1-19. 及び Jean MESNARD: *Les Pensées de Pascal*. S.E.D.E.S. p. 371-375. なお拙論 *Sur le processus du Pari de Pascal*. in *Etudes de Langue et Littérature Françaises* N°. 34. p. 27-28. I-2. i).

7) モンテーニュはこの引用に続けて、《Je m'en vais clorre ce pas par ce verset ancien que je trouve singulièrement beau à ce propos: ((Mores cuique sui fingunt fortunam.))》. Les Essais de Michel de Montaigne. éd.

Villey et Saulnier P.U.F. p. 267. 従ってモンテーニュはピリユス王のエピソードにパスカルの付与した意味を見ていない。

8) このページの書き取り手はいくつか文法的なあやまちを犯している。 divers affaires, leur logemens, leur conditions, ils n'avoit (性数の不一致)。又 même は常に mesmes と s を付けている (quant mesmes, mesmes quant, il s'ennuieroit mesmes). la moindre chose [...] suffisent (これはおそらくパスカルに責任があるだろう)。又文法の他に綴りにも問題がある。 penser は常に panser, laisser は laissair. 他方 3 ページ XII はやはりパスカル以外の手で記されている。こちらは文法的にも綴りの点からも問題はない。このことから両者は異なる人物によって書き取られたのではないだろうか。専門家の筆跡鑑定を待ちたい。

9) 前田陽一。前掲書 3 ページ参照。

10) メナール教授の同書の ≪le divertissement≫ と題された p212 ~ 219 も合せて参照。なお、同教授以外にも、ル・ゲルンが XIV を引き合いに出して、 ≪Le lien entre le divertissement et l'ennui est...évident.≫ (Michel et Marie-Rose Le Guern, *les Pensées de Pascal*, p. 116) と述べている。

11) 但し、引用文中の *dépendance* という語は断章 78 に登場している。

12) この点はさらに第四章で探求される。

13) XX にも、パスカルは後で加筆をほどこすが、その加筆以前の状態という意味。

14) すなわち XII - XV となる。

15) この他に 卅, 卅 なども使われている。

16) 事実 P.-L. Couchoud はそのように考えている。Blaise Pascal: *Discours de la Condition de l'Homme*. Albin Michel. p. XIX.

17) 以下に説明する B, C, D による変更を表にして示す。本文, 表, 写真版を相互に参照されたい。

3 XIV - XV (fin)

① XIV - XIV 余白の加筆 (= XVII の文章を修正したもの) B / B - XV (fin)

② XIV - XIV 余白の加筆 B / B XVII

4 ① XIV - XIV 余白の加筆 B / B XVII C / C XX

② XIV - XIV 余白の加筆 B / B XVII - XVIII C / C XIX - XX

③ XIV - XIV 余白の加筆 B / B XVII C / C XXII - XXIII 下側余白の加筆 D / D XV 上側余白 - XV (fin)

18) J. Mesnard. *Pascal*. p. 155-156.

19) L. Lafuma *Œuvres Complètes de Pascal*. p. 495.

20) ペリエの序文は、フィヨー・ド・ラ・シェーズ (v. 1630–1693) の *Discours sur les Pensées de Pascal* を参考にして書かれたものと言われている。又『パンセ』中には ≪A. P. R≫ と題された *liasse* があって、一般的にこれは A Port-Royal の略と考えられており、パスカルがポール・ロワイヤルで行った講演の下書の一部と解釈されている。ペリエ、フィヨーの証言と ≪A. P. R≫ の記述では一致せぬ点が少なからずあるように思われる。この問題は、いずれアポロジエの全体像について考察する時に、再び取りあげる。

